「別名で保存」される『大いなる遺産』
── ピーター・ケアリー『ジャック・マッグズ』

梶山 秀雄

『ジャック・マッグズ』（1997）は、『オスカーとルシンダ』（1988）、および『ケリー・ギャングの真実の歴史』（2001）で、ブッカー賞を二度受賞したオーストラリア人作家ピーター・ケアリーによる作品で、ディケンズの『大いなる遺産』を主人公ジャック・マッグズ（＝マグウィッチ）の視点から書き直すという体裁になっている。舞台は 1837 年のロンドン、マッグズは「息子」フィップスが紳士となった姿を見たい一心で、流刑地オーストラリアからこっそりと舞い戻ってくる。しかしながら、肝心の「息子」は不在で、手がかりもなく隣家の従僕として帰りを待つマッグズに、新進作家トバイアス・オーツがある取引を持ちかける。フィップスの捜索に手を貸す代わりに、催眠術の被験者となれというのだというのが物語の発端部分である。

ケアリーが『ジャック・マッグズ』の構想を得たのは、ジャマイカのリゾート地でのことで、サイードの『文化と帝国主義』を読んでいたケアリーは、突如としてそこに「自分の先祖」であるマグウィッチを「発見」する。[i] それまでディケンズ作品を読んだことがなかった、と告白していることからも分かるように、「オーストラリアの象徴的祖先、英国から追放された人間としてのマッグズ／マグウィッチの復権」（Author Interviews）という戦略が明らかに先行している。この時点ではまだ、この小説がマッグズの一人称による語りのみで構成される可能性も十分にあった。しかし、さらにケアリーは「ディケンズはマグウィッチのモデルとなるような人物を実際に知っていたにもかかわらず、それをそのまま書くことができなかったのではないか」と考え、ディケンズをモデルとした作家トバイアス・オーツを登場させることを思いつく。『ジャック・マッグズ』はマッグズの物語であると同時に、『大いなる遺産』がどのように成立したか、を解明する「ヒストリオグラフィック・メタフィクション」なのである。[ii]

『ジャック・マッグズ』において特徴的なのは、ディケンズの分身であるトバイアス・オーツという作家の存在を通して、「小説を書く」という行為が前景化されている点である。マッグズの物語を題材に『マッグズの死』という作品を生み出そうとするオーツの姿は、『大いなる遺産』を参照しながら『ジャック・マッグズ』を作り出すピーター・ケアリーに重なり合う。この物語の根底には、先行テクストをどのように変形して新しい物語を書くことができるか、という問いが鳴り響いている。その際に重要な役割を果たすのが、オーツがマッグズに対して使うメスメリズムである。メスメリズムはマッグズから物語を搾取し、作者―登場人物のメタファーとして機能すると同時に、そうした支配関係が転覆する契機として描かれている。本論では、このメスメリズムという疑似科学の歴史を参照しながら、『ジャック・マッグズ』がどのように『大いなる遺産』を書き換えたのか、検証し

てみたい。

１．

作中に登場する若き日のディケンズを思わせるトバイアス･オーツという作家は、『キャプテン・クラムリー』や『ミセス・モアフォールン』なる作品で作家としての評判を確立したものの、楽しんで書いたものがそのまま作品になっていた幸福な時期は終わり、ひどいスランプに苦しんでいる。現在の仕事は『オブザーバー』紙に掲載する「人物素描」であり、その中身はというと事件や人物の単なるスケッチに過ぎない。これまでの英文学史には存在しなかった「犯罪者の心理にまで入り込むような作品」（195）を書こうとしているオーツは、知人パーシー・バックルの屋敷に突然やってきたジャック・マッグズの怪しげな様子から犯罪の匂いをかぎ取り、催眠術をかけてマッグズの記憶を引き出すことを了承させる。しかしながら、そうした「証拠」の採集は、小説を生み出す手助けとはならない。むしろメスメリズムや骨相学、あるいは観相学といった科学にのめり込むあまりに、オーツはスランプに陥っているのだとさえ言える。

オーツの部屋には、ホルムアルデヒド溶液に浮かぶ泥棒の「手」、絞首刑に処された犯罪者のデスマスク、実験の記録、スケッチ、ノート、作品づくりのためのさまざまなメモがラベルを貼った封筒にしまわれ、整理棚や小さな戸棚に整然と保存されている（49-50）。「それらがいつの日か、滑稽な冒険物語の作家としてではなく、サッカレーをも凌ぐ作家としての名声をもたらしてくれることを願い」ながらも、「小説家というよりも科学者」と形容されるオーツは、犯罪に関するデータベースを構築する探偵のようだ。実際にオーツは、マッグズの断片的な記憶の中に出てくる「ペリカン」という言葉から、マッグズがオーストラリアからの脱獄囚であることを「推理」しさえする（96）。犯罪者に対して安全な距離を保ちながら、オーツは自分以外を作中人物のように扱う、絶対的な探偵＝作者として君臨しているのである。

しかしながら、そうしたオーツの神のごとき「作者」の立場は、物語の後半「泥棒逮捕請負人」パートリッジの登場から崩れ始める。催眠術で過去の記憶を聞き出す報酬として、オーツはこの超能力者パートリッジをマッグズに紹介し、忽然と姿を消した「息子」フィップスの捜索を依頼することになる。パートリッジの能力はサイコメトリングと呼ばれるもので、ある物質に触れることで、そこには保存されている記憶を読み取る一種の透視能力である。その原理は「メスメリズムによってトランス状態に置かれた透視者が、その人物の体の一部に触れることで交流回路（rapport）を開く」ものであり、「都合のよいことに、それは常に身体である必要はなく、郵送された一房の髪であっても十分であった」という（Winter 143）。こうした透視現象は、この物語の舞台となる１９世紀以前にも既に確認されており、メスメリズムの創始者であるメスマーの弟子、ピュイセギュール伯爵は、磁気催眠に入った患者が、通常の催眠とは違う様相を呈していることを発見していた。催

眠から覚醒した際にその間の記憶を失っていることはよく知られていたが、磁気催眠に入った患者は普段よりもはるかに高い知性を発揮し、透視能力によって病気の診断能力を発揮したと言われている。ピュイセギュールの治療所ではこうした患者は、「先生」と呼ばれ、実際に病気の診断と処方を行っていた。こうした超能力の実在に関する真偽はともかくとして、オーツも繰り返し述べているように、肝要なのはサイコメトリングがメスメリズムと同根であるということである。

パートリッジもまた何者かにメスメリズムを施され、サイコメトリング能力に目覚めた「先生」であったに違いない。パートリッジの別名「泥棒逮捕請負人」が意味するのは、マッグズと同じようにかつて催眠術により過去を告白させられ、自分の記憶を「盗まれた」ことへの復讐なのではないか。

> "I do believe," he offered, "we have a mutual acquaintance."
>
> Wilfred Partridge considered Tobias Oates without interest.
>
> "My friend, Dr Eliotson."
>
> "There are many men of science," said Mrs Partridge, coldly, "who have studied my husband's powers."
>
> "Mr Partridge is a student of Animal Magnetism. You studied with M. Labatte," Tobias addressed the husband. "Dr Eliotson wrote a paper on your Magnetic techniques. He was particularly impressed with the case of . . . who was it? You interviewed the witnesses Magnetically and then made the arrest yourself?"
>
> "Eliotson?" the other responded moodily. "I don't recall."
>
> "It is published in *The Zoist*." (JM 270-71)

オーツが言う「共通の知り合い」エリオットソン博士に対するパートリッジの冷淡な反応は、サイコメトラーが誕生する経緯を考えれば当然なものだと言えるだろう。[iii] 数々の行方不明者を探し出し、新聞に取り上げられるまでになったパートリッジにとっては、そもそも自分がメスメリズムの実験対象であったことは隠蔽すべき記憶であり、サイコメトラーとしてのパートリッジを作り出した科学者の存在は忘却されなくてはならないのである。こうしたパートリッジの自己認識は、『大いなる遺産』のピップのそれと同型を描く。ジェントルマンとして周囲から認知されているピップにとっては、貧しい幼年時代を知るジョーは忌避されなくてはならず、「父」を名乗る脱獄囚マグウィッチは、全てをぶち壊しにしてしまう脅威と映る。パートリッジもまたテクノロジーによって生み出された忘恩の怪物、フランケンシュタインなのである。

結局、パートリッジは証拠として提供されたフィップスの肖像画を売り払おうと、こっそり持ちだそうとしたところをマッグズに発見され惨殺されてしまうのだが、その凶暴性

を目の当たりにしたオーツはマッグズに対する支配力を失ってしまう。犯罪者から記憶を盗み出す科学者であったはずのオーツは、マッグズとの逃避行に否応なく同行させられ、ついには誰にも知られたくなかったはずの義妹との不倫の事実をマッグズに告白せざるを得なくなる（291）。このオーツの告白によって、盤石だと思われた作者―登場人物、施術者―患者の支配関係は崩壊し、「作者」の座をめぐる闘争へと発展していくのである。

２．

メスメリズムに向けられた批判の中には、施術者と被験者の間に擬似的な愛情関係が生じてしまう危険性というものがあった。ただでさえ密室において男性と二人きりになることがなかった当時の女性が、じっと瞳をのぞき込まれ催眠状態に置かれた後に、施術者に対して愛情めいた感情を抱いてもなんら不思議はない。フロイトの精神分析の対象が（当時女性に特有の病とされていた）ヒステリー患者であったこと、メスメリズムの公開実験の図版を見ても、催眠術の大半はやはり「女」に向けられている。しかしながら、『ジャック・マッグズ』で催眠術が効力を発揮するのは、「男」に対してだけである。いかがわしい簡易宿泊所で、オーツが催眠術をかけて過去を聞きだそうとするのも男なら（239）、スペンサー・スペンス卿に扮装して接触伝染病の処置にあたった際には、偽薬効果でバックル邸の執事、スピンクスを死亡させてしまう。もともと催眠術に関しては懐疑的なマッグズでさえも、スピンクスの肺には「磁性体液」があると信じこみ(187-88)、かける男もかけられる男たちも催眠術の実効性については微塵も疑いを持たない。この男たちの間で催眠術が飛び交う時に、潜在的な誘惑の次元が開かれ、ホモセクシュアルな感情が召喚されるのである。

もとよりマッグズは強烈なセックス・アピールを有する人物として描かれているが、最初にその軍門に下るのはバックス邸の執事の一人コンスタブルである。病身のスピンクスを抱きかかえるマッグズの姿を見て、「マッグズに頭をもちあげてひざにのせてもらい、あのごつごつした手で体をさすってもらいたいもんだ」と述懐する。続くコンスタブルの語りでは、フィップスとホモセクシュアルな関係を結んだこと、そしてそれが原因で親友のアルバート・ホープが自殺したことが語られる（180-83）。そのコンスタブルの「尻を突いて交わった」フィップスは、家庭教師のリトゥルヘイルズから手ほどきを受け、という具合に男たちは、ホモセクシュアルな関係で連鎖している。「どんなばかな男だろうと尻がでかいというだけで、フィップスは恐怖を感じる。常識などというものはどこかへ吹っ飛んで、ただただ相手のいいなりになるのが当然と思ってしまう」（347）というフィップスの不安には、ホモセクシャルがメスメリズムと同じく支配―被支配の関係として描き出されている。

こうして、ホモセクシュアルな関係が横溢する『ジャック・マッグズ』においては、「父」と「息子」の関係もまた同性愛的な様相を呈することになる。実の息子がいるにも関わら

ず、血の繋がりのない「息子」フィップスに固執し、１０年間絶えることなく送り続ける手紙は、それなしでは二人の関係をつなぎ止めることができない父から息子へのラブレターなのである。そこで書かれるマッグズの物語は、紳士の父親にふさわしい理想化されたものであったに違いない。だからこそ、オーツの未完成原稿『マッグズの死』を盗み読みしたマッグズは、そこに自分の過去がありありと書かれていることに憤慨し、オーツをベルトで縛り、「スグリの実をちょんぎる」と脅しをかける。去勢はオーツの作品を生み出す能力を奪うこととイコールであり、マッグズは睾丸を切り取る代わりに、自分の記録およびオーツが『マッグズの死』のために書きためたスケッチを暖炉で燃やしてしまうのである。

『大いなる遺産』を書き換えることで、ケアリーがジャック・マッグズの「息子」として自らを位置づけようとしたように、マッグズもまた血のつながりのない息子、ヘンリー・フィップスに真実の物語を伝えることで、その疑似家族的な関係が途切れてしまわないようにと願う。この父の手紙は多分に両義的なものである。「決して俺のようになるな」と言いながら、自らの半生を語らずにはおれない。しかしながら、フィップスにとっては、オーストラリアに流刑にされた「父より」と書かれた手紙は、迷惑以外のなにものでもなく、やはり同性愛者である家庭教師リトゥルヘイルズのアドバイスに従って、ただただ機械的に「偽り」の、あるいは「安らぎをあたえる」返信をするのみである（357）。かくして、女の存在しないホモソーシャルな世界では、「息子」に宛てた父の物語は、すべて徒労に終わることになる。父と息子の関係は虚構的なものでしかなく、息子に対する影響力を証明するために父はいつも物語を必要とする。だからこそ、父は息子に宛てて手紙を送り続けるのである。

３．

父が父であることを息子に対して証明しようとする一方で、女は不気味な沈黙を守っている。既に見たように、「真実の物語」を引き出すための催眠術からも女は遠く離れている。オーツは自らの家庭において、父の借金問題、および家計の苦しさを妻にそれとなくなじられ、その挙げ句、愛人関係にある義妹のネックレスを質入れし、関係を明るみに出されそうになるなど、家庭の統治に関して催眠術は全くといっていいほど効力を発揮しない。従来、催眠術がヒステリーを治癒させる目的から考案され、その症状の再現が研究者の立ち並ぶ中で一種の見世物として成立していたことを考えると、この非対称性はなんとも不可解に思える。

フロイトは催眠術による治療を通して、ヒステリー患者の多くが近親者あるいは知人に性的ないたずらを受けており、その抑圧された記憶が症状の原因となっていることを「発見」した。しかしながら、フロイトはこの発見を公表することを差し控える。あまりにセンセーショナルな内容が社会に及ぼす影響に配慮したかのように思われるが、実際はそう

したヒステリー患者の告白が真実ではないことに気づいていたからに他ならない。翻って考えると、オーツがもし義妹のヒステリー症状を軽減させようと催眠術を施したなら、自分との性的な関係を告白されてしまうことになる。しかもそれは単なる治癒にいたる「物語」ではなく、「真実の物語」でもある。だからこそ、オーツはリジーには催眠術をかけず、マッグズに堕胎薬の仲介を依頼してまで沈黙させようとするのだ。

かくして、女が語ることを禁じられたこの世界には、死産した物語の影が常につきまとう。ホモセクシャルな欲望が渦巻くイギリスでは妊娠は祝福されず、赤ん坊は生まれない。マッグズと幼なじみのソフィアの子、そしてオーツと義妹リジーの子、いずれの堕胎にも関与しているのが、マッグズの養母メアリー・ブリトゥンである。数十年前にマッグズの息子を間引きしたメアリーは、義妹リジーの妊娠に気づいたオーツの妻、「メアリー」・オーツに堕胎薬を売り渡す。マッグズとオーツの二人の物語のいわば「影の作者」であるメアリー・ブリトゥンは、『大いなる遺産』のハヴィシャム夫人がそうであるように、その内面が語られないことで、主人公の誤読を促進させ、物語に多大な影響を与える。オーツの妻であるメアリーは、リジーに死産させたオーツの息子をシーツにくるみ、『マッグズの死』の草稿が燃やされた同じ暖炉で処分してしまう。それ以後、夫に憎しみをいだくようになったメアリーは、「その根がのちのち心のいちばん奥深くまでに達し、それが頭を狂わせ、遅鈍でひどくうすのろな女になり、著名な夫のいうことの半分も理解しない妻だと世間に思われるようになる」(342)。マッグズとオーツが作者の座をめぐって争うのをあざ笑うかのように、二人のメアリーは息子たちを死産させて沈黙する。[iv] そして、作者であったはずの男たちは、ただその沈黙の意味を（決して答えてはくれないだろうと分かっていながらも）推し量るより他にはないのである。

ここで原テクストである『大いなる遺産』でもまた、その冒頭部分から生まれなかった子供の刻印が押されていたことを想起してもいいだろう。

> To five little stone lozenges, each about a foot and a half long, which were arranged in a neat row beside their grave, and were sacred to the memory of five little brothers of mine--who gave up trying to get a living, exceedingly early in that universal struggle--I am indebted for a belief I religiously entertained that they had all been born on their backs with their hands in their trousers-pockets, and had never taken them out in this state of existence. (GE: 3)

「弟たちはみんな両手をズボンのポケットにつっこんで仰向けに寝たまま産まれてきたのだ、そしてこの世に出てきてもその手を出さなかったのだ」という台詞は、ピップの５人の弟ともが死産だったことを示している。『ジャック・マッグズ』の結末では、マッグズはパーシーに囲われていたマーサを連れてオーストラリアに戻り、そこで次々に「５人」の

子をなしたとある（356）。ここで産まれた５人の子供が、『大いなる遺産』で産まれなかった５人の赤ん坊であったことは明白である。ケアリーが試みたのは、この『大いなる遺産』で生まれてこなかったピップの兄弟の一人、トバイアスに声を与えることだったのではないか。この「トバイアス・マッグズ」がオーストラリア人の祖先マッグズの血を伝え、作家ピーター・ケアリーの祖先となったことは想像に難くない。

結論

『ジャック・マッグズ』を論ずる上で障害となるのは、ポストコロニアリズム作家としてのピーター・ケアリーのイメージである。「マグウィッチから書き直した『大いなる遺産』」というアイデアがそのイメージにあまりにも適合するあまり、ディケンズがヴィクトリア朝的な道徳観ゆえに、売春や堕胎、同性愛について直接的な言及ができなかったことを指摘し、そうした古びた規範をあっさりと破り「全く新しい物語」を書いてみせたケアリーを賞賛するといった典型的なパターンに陥ることになる。しかしながら、随所に挿入された『大いなる遺産』を始めとするディケンズ作品との照応関係、催眠術への傾倒といったディケンズの伝記的事実の挿入部分からも明らかなように、ディケンズはケアリーにとって決して乗り越えられるべき敵ではなく、どのようにして物語を作り出すかという永遠のテーマを共有する先達なのである。

『ジャック・マッグズ』とは、「真実の物語」に対する不信感、小説という形式への強烈な自意識、といったポストモダン以降の認識と、ポストコロニアリズムが要請する「植民地からの異議申し立て」という大義の間で引き裂かれている物語である。作者―登場人物、あるいはメスメリズムの施術者―被験者の関係において暗喩される宗主国―植民地の関係は、無根拠で転覆可能であるとしながらも、そうした図式を利用した対位法でしか自らを語れないところに、オーストラリア人作家ケアリーの困難がある。マッグズやマグウィッチには語るべき「真実の物語」があるのに対して、語るべき過去や経験も持たず、ニューヨークに暮らし、仮想の先祖の物語を「発見」することしかできない、ある種の閉塞感がここには書き込まれているのではないだろうか。

註

i サイードは、「二十世紀にイギリスから独立されるにいたるオーストラリアの歴史をあぶりだし完全なかたちで復元するとすれば」（Said 9-10、傍点引用者）、マグウィッチと和解した後のピップが携わる植民地貿易の相手がアジアであり、オーストラリアが依然として忌避すべき暗部として描かれていることに注目すべきだと述べている。

ii この小説は、通常の三人称の語りに加えて、マッグズがフィップスに宛てた手紙、そしてオーツによって書かれる『マッグズの死』の断片によって構成され、それぞれの物語が相対化される入れ

子状の構造になっている。こうした「メタフィクション性を有しながら、それと同時に歴史上の出来事や人物の所有権を主張するようなよく知られた人気小説」（Hutcheon, *Poetics* 5）をリンダ・ハッチェオンは「ヒストリオグラフィック・メタフィクション」と名付けている。

iii ここで語られるオーツとパートリッジの「共通の知り合い」、ジョン・エリオットソンはディケンズに催眠術の手ほどきをしたことで知られる実在の人物である。イギリスではメスメリズムの本格的な流入は遅く、1837 年にフランスの有名な動物磁気治療家デュポテ男爵がロンドンのユニヴァーシティ・カレッジ病院の医師エリオットソンに教えたのが本格的な流入の始まりと言われている。

iv『ジャック・マッグズ』がもう一つの『大いなる遺産』を目指して書かれたように、この物語では双数関係が重要な主題となっている。作者ピーター・ケアリーの分身としてのジャック・マッグズとトバイアス・オーツ、マッグズの育ての母メアリー・ブリトゥンとオーツの妻メアリー・オーツの二人のメアリー、さらに、マッグズからの送金によりヘンリー・フィップスと、その隣人でやはり遺産相続により成り上がったパーシバル・バックルは、それぞれがもう一人のピップである。

主要参考文献

Allen, Brooke. “Jack Maggs.” *The New Leader*. 23 Feb 1998: 13.

Bradley, James. “Bread and Sirkuses: Empire and Culture in Peter Carey’s *The Unnusual Life of Tristan Smith* and *Jack Maggs*.” *Meanjin* 56(1997), 657-65.

Carey, Peter. *Jack Maggs*. New York: Vintage, 1997.

--. Author Interviews at Powells.com. *Powells.com*. <http://www.powells.com/authors/carey.html>

Dickens, Charles. *Great Expectations.* Oxford: Oxford UP, 1994.

Gray, Paul. “Jack Maggs.” *Time*. 23 Feb. 1998: 84.

Hassall, Anthony J. “A Tale of Two Countries: *Jack Maggs* and Peter Carey’s Fiction.” *Australian Literary Studies* 18(1997): 128-35.

--. *Dancing on Hot Macadam: Peter Carey’s Fiction*. Queensland: U of Queensland P, 1998.

Hutcheon, Linda. *Narcissistic Narrative: The Metafictional Paradox*. London: Routledge, 1991.

--. *A Poetics of Postmodernism: History, Theory, Fiction*. London: Routledge, 1992.

--. *The Politics of Postmodernism.* London: Routlege, 1993.

Kaplan, Fred. *Dickens and Mesmerism: The Hidden Springs of Fiction.* Princeton: Princeton UP, 1975

Meinig, Sigrun. “An Australian Convict in the Great English City: Peter Carey’s Jack Maggs.” S*outherly. Band* 60 (2000): 57-73

Miller, Karl. “Jack Maggs.” *The New Republic*, 20 April. 1998: 40.

Pfeil, Fred. “Jack Maggs.” *The Nation*, 2 March. 1998: 27.

Ross, Robert. “Expectations lost and found (Peter Carey’s Jack Maggs).” *World and I*. July 1998: 250.

Said, Edward W. *Culture and Imperialism*. New York: Knopf, 1993.

Wilson, Colin. *The Psychic Detectives.* Berlkey: Berkley Pub Group, 1987.

Winter, Alison. *Mesmerized: Powers of Mind in Victorian Britain.* Chicago and London:U of Chicago P 1998.

Woodcock, Bruce. *Peter Carey: Contemporary World Writers*. Manchester and New York: Manchester UP, 1996.